



は じ ま り



「偶然」という神の悪戯の重なりが、私達が目撃した日本創世叙事詩のはじまりです。偶々出向いた遠い東北の地の秋田において私達は島根の方々と偶然に出会いました。島根と言えば出雲大社が頭に浮かんでいたところ、、、「島根に行くのなら、隠岐の島に行かないと悔やむ」と聞く。。。隠岐の島、、どこだ?地図では見た事があるが、正確にはその場所すら言い当てられない「ミステリー感」を持つ島の名前。気持ちが高まりました。

そして、「隠岐の島に行かないと悔やむ」、その言葉の意味と気持ちの高ぶりを自らの目で確かめべくして、私達は兎にも角にも隠岐に向かいました。1泊2日の極めて軽い「好奇



心の確認」の気持ちで訪れた旅でしたが、最初の訪問地で出会った隠岐の島ジオパークの野邊様(ジオパーク推進機構筆頭理事)から私達はその言葉の意味の深さを知る大いなる衝撃を感じました。この島こそ、日本の「はじまりのはじまり」なのかもしれない! 学校で学んだ日本史が心の中で揺らぎました。以降、私達は1年間で3回この地を訪ね、日本の古代から現代に続く私達の先祖とこの国の大いなる営みを学び、そこに大いなるロマンを感じました。

この壮大な私達の国の創世叙事詩をこれから皆様と共に読み進み、目撃し、そして確認しながら、明るい未来を想像(創造)していく旅路にお誘い致します。



隠岐の島

地質学と人文学を一気に学べる、ダイナミズムの塊

隠岐の大地を知ることは、地球そのものを知ること。

大地と強く結びついた生態系や人の営みから、

「地球とは何か」の答えを見つける手がかりが見えてきます。

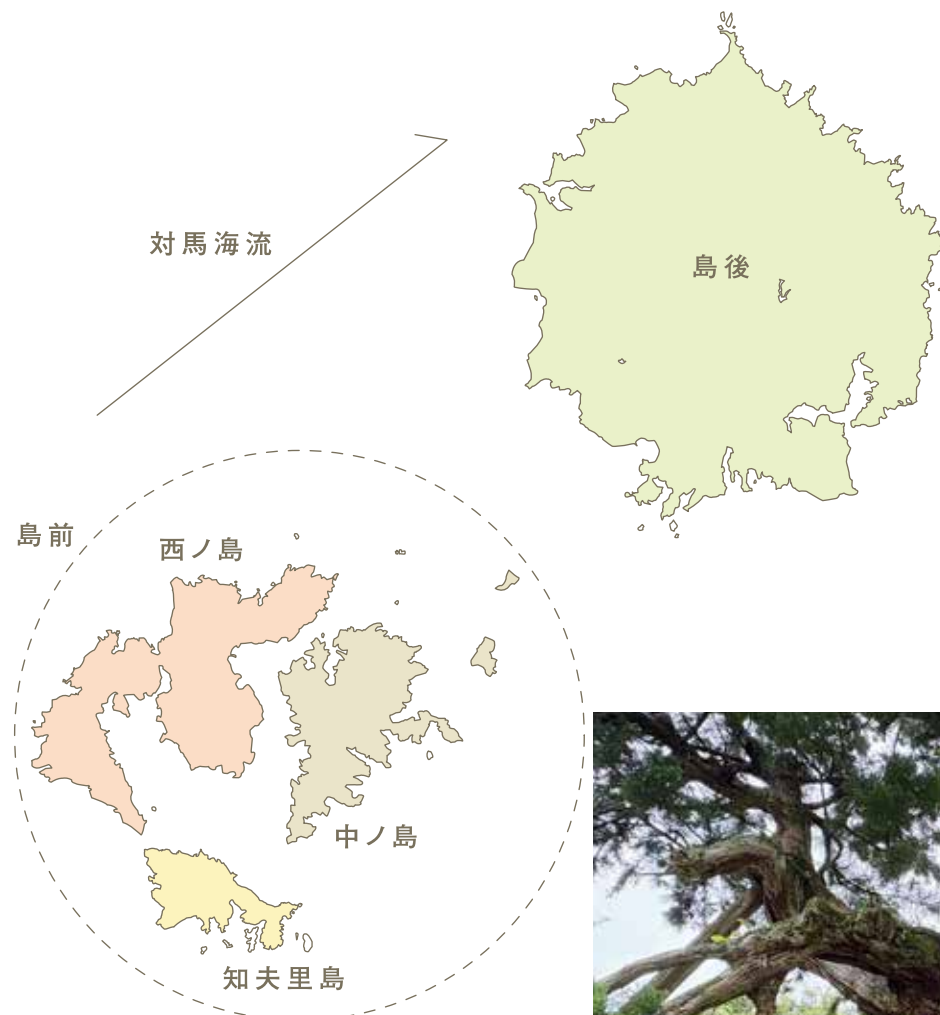
1 岩石が語る、地球46億年の記憶 地殻・マントル・核からなる地球で、人類が到達したのは地殻まで。マグマとともに上昇した岩石「マントルゼノリス」は地球内部を知る貴重な手がかりで、島後の火山活動がそれを地表に届けました。隠岐の島には地球の46億年の歴史が詰まっている石が沢山転がっています。

2 火山が生んだ、もう一つの海 太古、1つの巨大な火山島だった島前は、噴火でできたカルデラに海水が侵入してできました。外周の島々が防波堤となって穏やかな内海が生まれ、天然の良港が海上交通を育んだ。島前3島は、カルデラの外輪山にあたります。

3 暖流と北風が交わる、豊かな海 暖かい対馬海流と大陸からの冷たい北西風が流れ込む隠岐の海は、2段の平坦な大陸棚から成る豊富な魚介の宝庫。古代では朝廷へ御食料を貢ぐ「御食国」、江戸時代では北前船の風待ち港として栄えました。

4 北と南の植物が同居する秘密 隠岐の島は、氷期が生んだ植生のタイムカプセル。水深70mと浅い日本海は最終氷期に陸続きとなり、南北の植物が同居。1万年前に離島となって植生が閉じ込められ、本州では高山でしか見られない植物が、隠岐では海岸沿いで咲くという独自の多様性が生まれました。

5 天皇が流された、遠くて豊かな島 隠岐は後鳥羽上皇・後醍醐天皇を迎えた遠流の地。都から遠くとも文化と流通が発達し、都から見て吉方位にあたることから、配流先に選ばれた理由と考えられています。



隠岐を構成する四島

島後：はじまりの島
(名の無い島)

隠岐の旅の入口となるのが、空港を擁する隠岐の島町。かつて火山が生み出した上質な黒曜石を求め、日本列島中から人々がこの島を目指しました。火山が結んだその交流の記憶は、江戸時代の北前船の賑わいを経て、今なお息づく人々の暮らしへとまっすぐつながっています。



巨木も、巨岩も、そのまま神さま

隠岐に点在する150以上の神社の中には、社殿すら持たず、大木や巨岩、入り江そのものを御神体とするものも。樹齢800年を超える大山神社の杉や、御客神社の巨岩を前にすれば、自然への畏れと祈りの原点を肌で感じられます。

2億5000万年前の岩が語る、日本列島誕生の物語

島で最も古い「隠岐片麻岩」に触れれば、かつて東アジアで巨大なプレート同士がぶつかり合い、日本列島がまだ大陸の一部だった時代の地球の鼓動を聞くことができます。

黒曜石が語りかける、3万年前からの物語

隠岐で採れた黒曜石は、はるか3万年前から中国地方を中心に新潟や四国まで運ばれ、人と文化が行き交う古代の交差点となっていました。

奈良時代の音色が、今も隠岐に

かつて役人の公務出張に用いられた青銅の鈴「駅鈴」。全国でわずか2つしか現存せず、その両方がこの島にあります。国の重要文化財に指定された千年の時を超える響き。

一つの島に、いくつもの文化

隠岐諸島で最も大きなこの島には、黒曜石の産地として、また北前船の寄港地として、幾多の人と文化が行き交ってきた歴史があります。その名残で集落ごとに異なる慣習や方言が今も色濃く残り、島を巡るだけで小さな文化の旅ができます。

波静かな日本海だからこそ生まれた「舟小屋」の風景

干満差わずか50cmという穏やかな海に守られ、木造船を食害や風雪から守る舟小屋の文化が今も息づく。太平洋側では決して見られない、隠岐ならではの海辺の情景。



知 夫 里 島

(島 前)



赤き大地に眠る、牧歌の記憶

隠岐でいちばん小さな島だからこそ、知夫里島には雄大な自然と古の記憶がぎゅっと凝縮されています。太古の噴火の記憶を刻む「赤壁」、そして700年代から受け継がれる知恵「牧畑」——地球の鼓動と人の営みの両方を、すぐそばに感じられる島。



■燃えるような赤に染まる断崖「赤壁」

知夫村西岸にそそり立つ鮮烈な赤い崖は、太古の火山の噴火口断面そのもの。鉄分を多く含む玄武岩マグマのしぶきが、空気に触れて赤く冷え固まった——目の前に広がるのは、地球が呼吸した瞬間が封じ込められた景色。

■千年近く受け継がれた、先人の知恵「牧畑」

赤ハゲ山を彩る石垣「名垣」は、700年代から1970年頃まで続いた農法「牧畑」の名残。放牧で土を休ませ、アワ・ヒエ、豆類、麦へと4年で一巡させる輪作サイクルによって、痩せた土地を絶えず活かし続けた——先人たちの知恵の結晶がここにあります。

■内海の集落にひっそり息づく、珍しい風習

本土にいちばん近い知夫村。その内海側「古海」集落には、道路7ヵ所に長さ30cmの柳の枝を突き刺して疫病除けを願う「蘇民将来社小神」という、他では出会えない風習が今も伝えられています。

■恋から生まれた、隠岐を代表する唄

北前船の船乗りとの恋物語から生まれたと伝わる民謡「どっさり節」。その発祥の地・知夫里島では、今も島の人々によって大切に歌い継がれています。

隠岐を構成する四島

中 ノ 島

(島 前)



海士町 — 歌と稲穂実る、挑戦の島

島前で唯一の平野と、豊かな湧水に恵まれた海士町。古くから稲作が盛んなこの豊かな島は、それゆえに後鳥羽上皇の配流先に選ばれたとも伝わります。多くの島外からの移住者を迎え入れる等、人と人との交流が盛んな風土が育んだチャレンジ精神は、今も島の発展を力強く突き動かしています。



■帝王が流された、歌の島

承久の乱に敗れた後鳥羽上皇は、1221年、この海士町へと配流されました。『遠島百首』をはじめ七百首を超える和歌をこの地で詠み、孤島での日々を歌に刻み続けました。

■280万年前の溶岩が贈った、豊かな平地

明屋海岸から焼火山(たくひやま)へと広がる平地は、さらさらと流れた溶岩が湾口を塞ぎ止め、湾内に土砂が積もってできた奇跡の産物。本来なら平地に乏しいはずの島前カルデラに、大規模な水田を可能にした大自然の采配。

■山の上から、こんこんと湧き出る水

金光寺山では、淡水と海水の比重差という不思議な仕組みによって、標高の高い場所でも清らかな水が湧き出します。この恵みが、ブランド米「奥津米」をはじめとするコシヒカリを育み、島前随一の穀倉地帯を支えています。

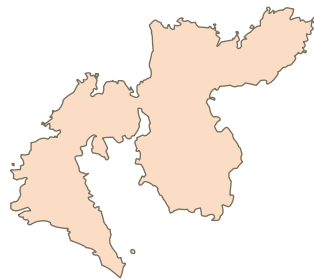
■良いものは、どんどん取り入れる島

本土と島後を結ぶ中継地として、また後鳥羽上皇の配流の地として、古くから外の世界との交流が盛んだった海士町。その開かれた気質は、今も島前高校に代表される「島留学」制度や新産業の創出という形で、島の未来を切り拓き続けています。



西ノ島

(島前)



神火とともに生きる、絶景の漁師町

島前の北西端、西ノ島町には、息をのむ断崖絶壁の絶景が広がります。航海安全の神として信仰を集める焼火神社は江戸時代から名高い観光地として知られ、後醍醐天皇の配流地とも伝わる、歴史とドラマに満ちた島。



■浮世絵にも描かれた、海を見守る神様

焼火山の中腹にたたずむ焼火神社の篝火は、かつて灯台として船を導いていました。安藤広重や葛飾北斎も「焚火の社」として描いた、江戸の旅人たちの憧れの地。1732年改築の現社殿は隠岐最古の建築とされ、平成4年に国の重要文化財に指定されました。



■イカが押し寄せる、由良比女神社の伝説

女神・由良比女命の手をイカが引|っ張ったという言い伝えにちなみ、毎年12月～1月になると由良の浜には本当にイカの大群が押し寄せ、かつて集落の人々は手づかみでイカを拾い集めたという—神話がそのまま今に息づく、不思議な光景。



■人の手だけで切り拓いた、海への近道

内海の集落から外海の漁場へと出るために、町の年間予算に匹敵する費用と労力を投じ、すべて手掘りで造られた船引運河。人の情熱が地形さえも変えた証は、今も現役の航路として島の暮らしを支えています。

■暖流が育てた、稀少な海藻

1910年、黒木御所前の海岸で国内初めて発見された「クロキヅタ」。西ノ島町別府湾と海士町菱浦湾に広がるその生育地は、1922年に、海藻としては唯一、国の天然記念物に指定されました。



■荒波が育てた、勇敢な漁師の町

北西から吹きつける強い波風が内海側に独特の集落景観を刻み、荒々しい自然と向き合い続けるなかで、勇気ある漁師気質が育まりました。その営みを、今も焼火神社が静かに見守っています。



風と波がつくる隠岐の絶景

地球が魅せる、今だけの奇跡

大規模な火山活動によって海面に姿を現したばかりの隠岐は、当初、荒れ果てた大地に過ぎなかった。だが数百万年にわたる激しい北西季節風と、それが呼び起こす日本海の荒波が、この大地を絶えず彫刻し続けてきました。隠岐の「絶景」は、今この瞬間もつくられている途中なのです。



激しい風と荒波が、わずか1万年で刻んだ絶景

冬の北西季節風が呼ぶ荒波の浸食によって、西ノ島町の摩天崖や知夫村の赤壁といった200m級の大断崖、隠岐の島町のローソク島や白島海岸、西ノ島町の通天橋・天上界——地球の営みが凝縮されたこれらの景観が生まれました。しかもそのすべてが、直近約1万年という、地質学的には「ついさっき」の時間でつくられたといわれています。



摩天崖に立てば、地球の時間が見えてくる

島前カルデラが生まれたときに陥没した外輪山の外側斜面が、気の遠くなるような歳月、北西の強風に削られ続けて切り立った崖となった。そして、その浸食は今この瞬間も止まることなく進んでいます。

目の前の絶景は、「今だけ」の奇跡

波と風に削られ続ける海食崖、海食洞、アーチ、離れ岩、波食台—隠岐の大地は今この瞬間も変わり続けており、近い将来、まったく違う姿になっているかもしれない。だからこそ、この景色に出会えることそのものが、かけがえのない体験となります。

隠岐には、数えきれないほどの「絶景」が待っている。

それは自然の力が生み出し、

長い年月をかけて島が守り抜いてきた景色。

水・風・大地・光が織りなす繊細なバランスのなかで、

刻一刻と表情を変え続ける—

一瞬一瞬が奇跡そのものの舞台である。

豊かな食材・隠岐の味

海、山、大地が響き合う、

旬の贅沢

隠岐は古代から海の恵みの産地として名を馳せ、朝廷へ御食料を献上する「御食国」に選ばれた土地。その豊かさは今も健在で、日本で初めて岩ガキ養殖の商業化を成功させるなど、恵まれた自然環境を活かした挑戦が続いています。



暖流が運んでくる、海の宝箱

対馬海流が北上する隠岐の海は、島根県全体の水揚げの実に4割を占める豊かな漁場。一年を通じたイカ漁、全国でも珍しい「カニかご」漁で獲れるズワイガニ、高級食材のアワビやサザエ、香り高い岩のりまで——食卓にのぼる恵みは尽きることがありません。

北前船が運んだ賑わいと食文化

最盛期には年間4,500隻もの北前船が隠岐に寄港し、島の食文化を豊かに育みました。明治期に訪れたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が、西郷の食堂で洋食にありつけると知って驚いたという逸話も、当時の賑わいを物語っています。

帝も、貿易も動かした、隠岐のアワビ

平安時代には天皇即位式の供え物として、また高級官僚のボーナスとしても珍重された隠岐のアワビ。江戸中期から明治にかけては「長崎俵物」の干し鮑・煎海鼠・鱧として、中国貿易の主役の一つにもなった、まさに最高級品。

一突きごとに経験が宿る、伝統の「かなぎ漁」

箱眼鏡で海底を見つめながら、長いヤスでサザエやアワビを一つひとつ突いていく伝統漁法。舟はくり抜き船「ともど船」から「かんこ船」、小型動力船へと変わっても、その丁寧な仕事ぶりは今も変わらず受け継がれています。

その土地で育ったものを、その土地で、旬のままに味わう。

それこそが食の原点であり、何よりの贅沢。

海・山・大地が響き合う隠岐では、

五感すべてを満たす豊かな四季の恵みが、

旅人を待っています。

地 層 ・ 火 山 活 動

― 火山が生んだ、大地のかたち

足元の岩石が、地球の内部を語りだす

島後の火山活動が地表まで届けてくれた岩石「マントルゼノリス」は、地球内部（核・マントル・地殻）を知る貴重な手がかり。隠岐ではなんと、これが何気ない石垣にも使われている―日常のなかに地球史が転がっている島。

もとは、1つの巨大な火山島だった

太古の火山活動で誕生した島前は、かつて1つの大きな火山島。マグマが噴き出してできた空洞に火山の中心部が陥没して巨大なカルデラが生まれ、その後の火山活動でカルデラ中央部が再び盛り上がり現在姿になりました。今、目にする島前3島は、そのカルデラの外輪山―大地のドラマがそのまま絶景になっています。

知夫村・赤壁が語る、太古の噴火の記憶

鉄分をたっぷり含んだ玄武岩マグマのしぶきが、空気に触れて赤く固まった噴火口の断面―それが知夫村西岸にそびえる「赤壁」。目の前に、太古の噴火の瞬間がそのまま刻まれています。

柔らかい溶岩が生んだ平地（海士町）

およそ280万年前の火山活動で流れ出したさらさらの溶岩が湾口を塞ぎ止め、積もった土砂が広大な平野をつくり出しました。本来なら平地に乏しいはずの島前カルデラに、大規模な水田を実らせた自然の贈り物です。



植 物

― 南と北が出会う、奇跡の楽園

北の花と南の花が、同じ場所で咲く不思議

隠岐と本土を隔てる日本海は、水深わずか70m。最終氷期には陸続きとなり、対馬海流の恵みで温暖なこの島へ逃げ込んできた南方系の植物（ナゴラン（主に沖縄に生息!）など）と、北方系の植物（ハマナスなど）が、肩を並べて暮らすようになりました。

1万年前、温暖化で海水面が上昇し、隠岐は再び離島となりました。その瞬間、島に閉じ込められた植物たちは独自の歩みをはじめ、豊かな多様性を育んでいきました。おかげで本州では高山でしか出会えない植物が、隠岐では海岸沿いにひょっこり咲いている―そんな贅沢な生態系が、ここにはあります。



神話のなかに、今も生きる島。隠岐には数多くの古墳や神社が点在し、『古事記』に記された「大八島」の一つにも数えられています。天照大神が「この島には美しい御木(みき)がある」と語ったことが、「おき」という島の名の由来とも伝わっています。

日本最古の書物に刻まれた、隠岐の名

712年に編まれた『古事記』の国生み神話で、隠岐は「隠伎之三子島(天之忍許呂別)」と呼ばれています。伊邪那岐命・伊邪那美命が淡路島、四国島に続いて3番目に生み出した島―日本という国そのものの誕生の場面に、隠岐は立ち会っています。

小さな島に、4つもの「名神大社」

平安時代の『延喜式神名帳』に記された全国2,861社のうち、強い力をもつ「名神」の格を得たのはわずか226社。隠岐には式内社16社、うち名神大社が実に4社(伊勢命神社・水若酢神社・宇受賀命神社・由良比女神社)もあり、島根の3国(出雲・石見・隠岐)で隠岐以外に名神大社があるのは、出雲大社・熊野大社の2社のみです。

島じゅうに、150を超える神々の気配

隠岐には大小合わせて150社以上もの神社が点在します。古代、新羅や蒙古の脅威に対峙する最前線でもあったこの島には、国を守るための格式高い神社が数多く築かれたと考えられています。

いいとこ取りの建築美、「隠岐造り」

出雲大社の大社造、伊勢神宮の神明造、春日大社の春日造―日本を代表する三つの様式を独自に融合させた「隠岐造り」の社殿が、この島には存在します。

『古事記』にも名を刻む隠岐諸島。名だたる祭神から素朴な自然信仰まで、

古来この地に息づく八百万の神々が、今も大切に祀られています。

島のあちこちに点在する神社、人々の手で受け継がれてきた神事―

それらは特別な行事としてではなく、

日々の暮らしのなかに静かに溶け込んだ敬意と親しみとして、今も生きています。



神話の国

八百万の神々すまう隠岐。昔も今も

人々の営み

絆が強まる隠岐の祭り、伝統も活気も自らの手で

良質な黒曜石の産地として、天皇遠流の島として、北前船の海運拠点として―隠岐は様々な地域と交流を重ね、外の文化を貪欲に取り入れてきました。それでいて離島ならではの独自の色を失わない伝統は、今も島に暮らす人々の手によって大切に守り継がれています。

一年を通じて、数えきれないほどの祭りと伝統行事

火山活動が生んだ起伏に富む地形によって、集落同士が隔てられた隠岐。だからこそ集落ごとに独自の風習や方言、祭りや伝統行事が育ち、その多くが国・県・町村の無形文化財に指定されている―一つの島のなかに、いくつもの小宇宙が息づいています。

古い形を守りながら、変わり続ける祭り

玉若酢命神社の「御霊会風流」、隠岐神楽(周吉神楽・穏地神楽)、子どもたちが祖先の霊を見送る「シャーラ船(精霊船)」―日本各地から伝わった祭りが、隠岐ならではの姿へと形を変えながら、今も脈々と受け継がれています。

「一勝一敗」に込められた、島の知恵。隠岐古典相撲

神への奉納相撲を起源とする「隠岐古典相撲」は、夕方から翌日の午後まで夜を徹して繰り広げられる壮大な祭り。狭い島のなかで人々が共に生きていくための知恵として、「2番勝負で一勝一敗」とするしきたりが生まれ、通称「人情相撲」とも呼ばれています。一勝を勝ち得た者は、必ず一敗しなければならない。しかも、真剣勝負をして負けることによって二番目の勝者に名誉の「真剣勝負の勝ち」を与えるという難しさ。でも、ここに「真の平和造り」のエッセンスが隠されているのかもしれません。

隠岐を歩けば、あちこちで祭りに出会える。何世紀もの時を超えて世代から世代へと受け継がれてきた厳かな祭礼もあれば、新しい人との出会いが生まれる催しもあります。祭りを愛する隠岐の人々は、熱気と笑顔と感謝にあふれるハレの日を、自らの手で守り、つなぎ、そして創り出し続けています。

隠岐の祭りは、遠い世界との出会いの証

海士町の「あご石神事」やトビウオにまつわる祭りは、黒潮文化として台湾や奄美とも通じ合う。さらに「隠岐国分寺蓮華会舞」に伝わる「面」のルーツは、遠く中国・東南アジア・インドにまで遡ると考えられています。小さな島の祭りが、はるかな海の道でアジアとつながっています。

帝王の心を慰めた、日本最古の牛突き

承久の乱で配流された後鳥羽上皇が、小牛たちの角突きを見て喜んだことが始まりと伝わる「隠岐の牛突き」。賭け事にはせず、あくまで島民の純粋な娯楽として受け継がれてきたこの伝統は、今も島後だけで見るができます。





後鳥羽上皇と隠岐神社

歌に生きた、治天の君の19年

心して吹け

隠岐の海の荒き波風

我こそは新島守よ

帝王を隠岐へ導いた、一つの決起

承久3年(1221年)、後鳥羽上皇は鎌倉幕府の実権を握る執権・北条義時の打倒を図り、「承久の乱」を起こしました。然し幕府方の反撃は凄まじく、挙兵からわずか1カ月足らずで京方は完敗。朝廷が武家に敗れるという前代未聞の事態の責めを一身に負い、乱の首謀者とされた上皇は、同じ年のうちに隠岐へと配流されました。

歌に刻まれた、19年の想い

配流の地・隠岐で、上皇は41歳から崩御する60歳までの19年間を過ごしました。都に帰る望みを抱きながらも、それは終に叶わなかった——その胸の内を、上皇は幾多の和歌に刻み続けております。隠岐へ向かう道中で詠んだと伝わる「我こそは新島守よ 隠岐の海の 荒き波風 心して吹け」には、自らを島の守り神になぞらえ、尚、王者としての矜持を失わぬ気迫がみなぎります。然し19年という歳月が重なるにつれ、望郷の念がにじむ歌も数多く残されました。夜ごと眺めた月に都を偲び、「命あれば 萱が軒端の 月も見つ 知らぬは人の 行く末の空」と詠んだように、先の見えぬ我が身の行く末を、ただ空に問うほかなかった切なさが胸に迫ります。島では『遠島百首』『隠岐五百首和歌』と呼ばれる歌群を編み続け、詠むことそのものが、孤島の日々を支える上皇の心の拠り所であったことが伝わってきます。

歌の王として、後世に名を刻む

後鳥羽上皇は、単なる政争の敗者ではありません。建仁元年(1201年)に和歌所を設け、自ら陣頭に立って『新古今和歌集』の編纂を主導した、日本の歌道史にその名を刻む歌人でもあります。日本三大歌集の一つに数えられるこの勅撰集は、繊細で技巧に富んだ独自の美意識を確立したとされます。藤原定家をはじめとする当代一流の歌人衆を率いながら、自らも生涯にわたり和歌に打ち込み、隠岐に配流された後もなお『新古今和歌集』に手を入れ続け、精選し直した「隠岐本」を編んだと伝わっております。政治の舞台では非業の最期を遂げながらも、歌の道においては後世まで高く評価される——まさに稀代の帝王歌人でありました。

今も島に残る、帝王の記憶

上皇が19年余りを過ごした行在所(源福寺跡)や火葬塚は、現在も中ノ島の海士町に残されています。上皇の崩御から700年の節目にあたる昭和14年(1939年)、その御霊を慰めるべく行在所跡のほど近くに創建されたのが隠岐神社です。上皇を御祭神として祀るこの社は、海士町に隣接する「後鳥羽院資料館」とともに、上皇が遺した宸翰や愛用の品々を今に伝え、歌に生きたひとりの帝王の記憶を、島の人々が今も大切に守り続けている場所となっています。

今回の旅では、当時の中核的派閥であった幕府に立ち向かう熱い思いを持ちながらも、戦いに敗れた一人の帝王の気持ちの足跡を辿り、そしてそのような帝王を温かくも迎え入れて大切にした隠岐の島の人々の心を感じて戴き度、後鳥羽上皇資料館、御火葬塚、隠岐神社参りを予定しております。

Entô - 窓いっぱい広がる、島前カルデラの物語

隠岐・海士町、菱浦の入り江にひっそりと佇む宿「Entô」。全36の客室は、どの部屋も余計な装飾を削ぎ落としたミニマルな意匠で統一され、主役は大きな一枚窓。さながら一幅の絵画のようであり、窓の先には、太古の噴火が刻んだ島前カルデラの稜線と、刻々と色を変える日本海が広がります。

朝は靄をまとい、夕べは茜色に燃え、夜は満天の星が波間に降りてくる。大浴場に身をゆだねながら、地球の呼吸をそのまま浴びるような、唯一無二のひとときがここにあります。



食事:イメージ



— 食事処 — Entô Dining

海に向かって大きく開かれたダイニングで主役を張るのは、島の生産者から届く魚や野菜、そしてスタッフ自らが磯で摘む海藻やハーブ。岩牡蠣、隠岐牛、崎みかんなど(季節によって変更)、皿の上の演者はそれぞれが光って宿泊者を楽しませます。ジャンルにとらわれない自由な発想で仕立てられる季節のコースは、「その日、島でとれた最良のものを、いちばんおいしい形で」という、つくり手たちの素朴で揺るぎない信条から生まれています。

朝は、海の幸と野菜がやさしく並ぶ和朝食が気持ちの良い1日を予感させます。派手さはなくとも、海士町の海と大地の滋味が、体の芯まで静かに染みわたっていく—そんな、島の豊かな暮らしをそのまま分けてもらうような朝食です。



食事:イメージ



— 食事処 — 隠岐の島で出会う1日だけの特別な名古屋・四間道レストラン MATSUURA

寛永期に建てられた油問屋の土蔵をそのまま活かした店内で、名古屋のフレンチ界を牽引する松浦シェフが目指すのは、地元の恵みをまっすぐに活かすフランス料理。三河湾で揚がる魚介や地元農家が育てる旬の野菜を主役に、素材そのものの色と香りを引き出すことを何より大切にしています。

シェフのスペシャリテは、月替わりで表情を変える「テリヌ」。断面に旬の彩りを閉じ込めたその一皿は、一枚の絵画のような美しさをたたえ、確かな技術と豊かな感性が息づく、松浦オーナーシェフの料理観を象徴する存在となっています。

落ち着いた蔵の空間にしつらえた個室は接待や会食、披露宴にも用いられ、著名なワイン生産者を招いたディナーイベントも定期的で開催。同業のシェフたちからも「一度は訪れたい店」として推薦されるなど、料理人からの信頼も厚い一軒です。今回の旅では、2日目のLunchは息をのむ知夫の海の絶景を眼下に、松浦オーナーシェフが隠岐の大自然の恵みを贅沢に使った記憶に残る特別なDéjeuner en plein air(デジュネ アン プレネール=青空の下での昼食)をプロデュース。この日限りで創造される、一瞬の奇跡を皆様にお届け致します。



出雲は、隠岐の島の対岸に位置しますが、それぞれの生い立ちや、追い求めた信仰の対象は大きく異なります。然し、私達の国は、決してそれぞれの主張を否定せずに、寧ろ「程よく多様な考え」を受け入れて、八百万の神々が平和に(時には、喧嘩をしながら?)住まう国家を形成していったのではないかと考えるに至りました。日本は単一民族で形成されていると世界的には言われていますが、実は古より多様性を受け入れてきており、それが故に、色彩鮮やかな、そして奥深いモザイクのような文化が生まれたのかもしれません。



	出 雲	隠 岐
神話における位置づけ	国づくり・国ゆずり神話の舞台。大国主命が地上(葦原中国)を治め、天照大神に国を譲った、目に見えない世界の中心。	『古事記』の国生み神話で、伊邪那岐命・伊邪那美命が淡路島・四国に続き3番目に生んだ島。大八島の一つとして、日本の国土そのものに数えられる。
大地の成り立ち	斐伊川・神戸川が運ぶ土砂が宍道湖・中海を埋めてできた沖積平野。上流は花崗岩地帯で、良質な砂鉄を産する。	火山活動が生んだ島。島前はカルデラ地形、島後は約2億5000万年前の隠岐片麻岩やマントルゼノリスなど、地球内部や大陸移動の記憶を今に伝える。
神社・信仰のかたち	出雲大社一社が際立つ、求心的な信仰の形。日本最古級の建築様式「大社造」で、高さ約24m・国内最大規模の木造本殿をもつ。	150社以上の神社が島内各地に点在。名神大社4社を含み、巨木・巨岩を御神体とする自然信仰が色濃く残る「隠岐造り」の社殿もある。
歴史上の役割	記紀神話や『出雲国風土記』に記された古代豪族・出雲氏の本拠地。旧暦10月、全国の神々が集うとされる「神在月」の地。	後鳥羽上皇・後醍醐天皇という二人の天皇が配流された「天皇遠流の地」。都から遠くとも文化と流通が栄えていたことが選ばれた理由とされる。
産業・人の営み	豊富な砂鉄を原料とする「たたら製鉄」が江戸後期から明治にかけて最盛期を迎え、一時は国内生産鉄の8割近くを占めた。	良質な黒曜石の産地として3万年前から日本各地との交流の起点に。江戸時代は北前船の寄港地として栄え、現在も御食国としての海の幸が豊か。

出雲神話の主人公・大国主命(オオクニスシ)は、須佐之男命(スサノオ)の子孫にあたる国津神(※)。『古事記』では兄弟である八十神たちに迫害されながらも、心優しい性格から動物や弱い者に手を差し伸べる神として描かれています。淤岐島(おきのしま=隠岐の島)から本土の因幡へ渡るため、海の鮫をだまして傷ついた兎を助けた「因幡の白兎」の逸話はその代表例で、兎の予言どおり大国主命は八上比売(ヤガミヒメ)に選ばれることになります。

兄弟の迫害から逃れた大国主命は、スサノオが治める根の国を訪ね、数々の試練を、スサノオの娘・須勢理毘売(スセリビメ)の助けを得て乗り越えます。試練を乗り越えた末にスセリビメを正妻とし、須佐之男命から授かった太刀と弓矢で兄弟たちを退け、最後は「大国主神」として地上(葦原中国)の王となりました。

国土を治める神となった大国主命は、海のかなたから訪れた小さな神・少彦名命(スクナビコナ)と力を合わせ、人々に農耕や牧畜、また病の直し方やまじない等、暮らしを支える知恵を授け、国土を豊かに開拓していったと伝えられています。大国主命によるこのような国の運営の物語が「国造り」神話で、今も出雲大社の主祭神として篤く信仰されています。

※国津神(くにつかみ)とは日本神話において地上の世界(葦原中国(アシハラノナカツクニ)に現れた土着の神々の総称。高天原(タカマガハラ)の神々である天津神(アマツカミ)と対比される存在。

大国主命が築き上げた豊かな葦原中国(地上の国)を巡り、高天原の天照大神は自らの子孫にこの国を治めさせようと、使者を遣わして国土の譲渡を求めました。最初に遣わされた天菩比神(アメノホヒ)は大国主命に服従してしまい、三年たっても復命しませんでした。次に送られた天若日子(アメノワカヒコ)も大国主命の娘と結婚してこの地に住みつき、任務を果たさなかったと伝わります。

そこで天照大神は、建御雷神(タケミカヅチ)と天鳥船神を出雲に遣わしました。二神は出雲の稲佐の浜に抜き身の剣を突き立て、その上に腰を下ろして国の行く末を問いて、大国主命に国譲りを迫ったといいます。大国主命は、漁をしていた息子の事代主神(コシロヌシ)に判断を委ね、コシロヌシは国譲りに同意して船を青柴垣に変え、その中に姿を隠しました。もう一人の子・建御名方神(タケミナカタ)は抵抗を試みたが力比べに敗れ、信濃国(諏訪)まで逃れて服従し、後に諏訪大社の祭神となったと伝わります。

子どもたちの意向を受けて、大国主命はついに国を譲ることを決意します。その代わりに条件として、天まで届くほど高い千木を掲げた壮大な御殿を建ててほしいと願い出ました。こうして築かれたのが出雲大社の起源とされ、大国主命はその御殿に鎮まり、以後は目に見えない幽(かく)れた世界(幽世)を治める神となったと伝えられています。

島根県出雲市に鎮座する出雲大社は、正式には「いづもおおやしろ」と読みます。大国主大神を祀る、日本を代表する古社のひとつとして、古くから篤く信仰されてきました。

国譲り神話に息づく創建の由緒

創建の年代は定かではないが、『古事記』、『日本書紀』の国譲り神話や『出雲国風土記』にその起源が記されており、日本における最古級(8世紀頃)の史料に記述されていることになります。大国主命が国を譲る代わりに天まで届く壮大な宮殿を望み、天照大神がこれに応じて建てさせたのが起源と伝わります。本殿はたびたび再建され、現在の御本殿は延享元年(1744年)の造営で、1952年に国宝に指定されています。祭祀を担う出雲国造家(千家家)は、天照大神の子・天穗日命を祖と伝えられ、代々宮司を世襲しています。約60年に一度、社殿を修造する「大遷宮」が行われ、平成の大遷宮は2019年に完遂しました。

神社群の中でも際立つ格式

延喜式神名帳では最高位にあたる「名神大社」に列し、出雲国の一宮でもあります。近代の社格制度でも最高位の官幣大社とされました。本殿は日本最古級の神社建築様式である「大社造」で建てられ、高さ約24m・国内最大規模の木造神社建築として知られます。「大社」を名乗る神社は、かつては出雲大社のみで、春日大社や住吉大社などが「大社」を称するようになったのは戦後になってからとされ、その社号自体が格別の由緒を物語っています。加えて旧暦10月には全国の神々が出雲に集うと伝えられ、地元では「神無月」ではなく「神在月」と呼ばれています。



宮島

— 厳島神社 —

島根県から中国地方を巡り、多くの神々の足跡を辿ってきた今回の旅。その締めくくりとして訪れるのが、広島県・宮島に鎮座する厳島神社です。

厳島神社には、日本神話に登場する宗像三女神、市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)・田心姫命(たごりひめのみこと)・湍津姫命(たぎつひめのみこと)が祀られています。三柱の女神は、天照大御神と素戔鳴尊の誓約(うけい)によって生まれた神々で、古来より海上交通や航海安全の守護神として信仰されてきました。出雲神話の舞台を巡った後に訪れることで、日本神話の壮大な世界をより深く感じていただけるでしょう。

平安時代には平清盛の篤い信仰を受け、海上に社殿を連ねる現在の壮麗な姿の基礎が築かれました。鮮やかな朱塗りの社殿は海に浮かぶかのような美しさで知られ、その景観は1996年に世界文化遺産へ登録されています。



最大の魅力は、潮の満ち引きによって見せる表情の違いです。満潮時には社殿の足元まで海水が満ち、神殿が海に浮かんでいるかのような幻想的な光景が広がります。古くから島そのものが神として崇められてきた宮島ならではの風景です。

今回の旅では、まず満潮時の社殿を参拝し、その後の自由散策では、潮が引いた宮島の姿に出会えるかもしれません。干潮時には、普段は海中に立つ大鳥居の足元まで歩いて近づくことができます。大鳥居の扁額は神社側と海側で文字が異なり、見る位置によって趣が変わるのも見どころです。社殿の意匠や彫刻など、細部にもぜひ目を向けてみてください。

海と神話、そして建築美が一体となった宮島の景観は、自然への畏敬の念を今に伝えています。旅の最後を飾るにふさわしい聖地で、神々とのご縁を感じながら、壮大な神話の旅の締めくくりをお楽しみください。

— 宿処・食事処 —

庭園の宿 石亭

庭園の宿 石亭は、宮島を対岸に臨む高台に佇む宿です。「ミシュランキー ホテルセクション2026」で2ミシュランキーを獲得しました。約1,500坪もの広大な庭園は、単なる庭ではなくひとつの作品です。樹々の間を吹き抜ける風、遠くに輝く瀬戸内海、刻々と表情を変える景色が、訪れる人を静かな時間へと誘います。日が落ちるころには庭に篝火が灯され、静寂と温もりに包まれた幻想的な風景が、明るい昼の庭園とはまるで別世界を描き出します。

庭園を抜けた先には、遊び心あふれる隠し部屋のような客室が待っています。お部屋でゆっくりとくつろぐのも、温泉に身を委ねるのも思いのままです。館内には同じ意匠の客室がひとつとしてなく、それぞれが独立した世界観を持っています。調度品や器、美術品の細部に至るまで亭主の美意識が息づき、まるで図書館や美術館に滞在しているかのようなひとときをお楽しみいただけます。

す。すべてのお部屋に共通するコンセプトは「音楽」「本」「チェア」です。

ご到着後の庭園散策のあとには、ラウンジでウェルカムドリンクをどうぞ。お食事のあとや、朝の温泉、散策のあとにも、ぜひお立ち寄りください。

ご夕食は、瀬戸内海の海の幸と山の恵みを取り入れた月替わりの会席料理です。味わいはもちろん、器や盛り付けに至るまで、すべてがひとつの作品として仕上げられています。献立を手に、次の一品への期待を膨らませながら席に着けば、運ばれてくるお料理は想像を超える芸術のようです。料理を待つ時間さえ愛しく感じられる、石亭ならではの特別な食体験となるでしょう。

旅の最後は、「何もしない時間」を愉しむ宿・石亭で。庭を眺めながら湯に身を委ね、日本創生叙事詩の旅を思い返せば、至福のひとときとなることを願っております。



食事: イメージ



宮島鮭 天扇 – 宮島で出会う、一貫の芸術

世界遺産・厳島神社の参道から少し離れた静かな路地に暖簾を掲げる、ミシュラン掲載の鮭処「天扇」。観光客で賑わう宮島の中にありながら、店内には凛とした空気が流れ、大人がゆっくりと過ごせる隠れ家の趣が漂います。

瀬戸内海は日本有数の豊かな漁場。その日の朝に水揚げされた魚介の中から、職人が最も状態の良いものを見極め、丁寧な仕事を施した一貫へと仕立てます。潮流の速い瀬戸内で育った真鯛や名物の穴子など、旬の味覚を味わえるのもこの店ならではの。素材本来の旨みを最大限に引き出す正統派の江戸前仕事こそが、この店の真骨頂です。

握りと並んで多くの人を魅了するのが、宮島産牡蠣のエキスを贅沢に用いた椀物。牡蠣の滋味が凝縮された澄んだ出汁は、一口含めば思わず顔がほころぶほど深い味わいです。主役の鮭を引き立てながらも、それ自体が目当てになるほどの存在感を放っています。

また、広島県産の本山葵の爽やかな香りと上品な辛みが、魚介の旨みをさらに際立たせます。

厳島神社参拝の余韻に浸りながら、瀬戸内の旬を味わう贅沢なひととき。宮島ならではの美食体験が、ここにあります。



食事:イメージ





「本物」だから見える景色がある 特別な車輦「宗春号」

旅の始まりは、扉が開くその瞬間から。宗春号の記念すべき初便は今回のツアーです。宗春号の名前の由来は、江戸中期の尾張藩主・徳川宗春公。女性や子どもたちが安心して城下を楽しめるよう、日本で初めて夜道に灯りをともした人物です。領民の幸せを第一に考え、自身の考えを貫いた宗春公の熱い思いに重ねて、車輦名を宗春号としております。

車体の色は「碧風(あおなぎ)」。碧く風いだ水面のような静かな色で、光や景色に呼応して表情を変えます。理想の色に出会うまでに作ったテストサンプルは19枚。車内には、坪庭の飛石をヒントにした大きさの異なる丸型照明、茶と灰の濃淡でまとめた「四十八茶百鼠」の配色、夜が深まるほどにそっと足元を照らす灯りなど、日本の心が随所に息づいています。

目的地に早く着くための道具ではなく、窓の外の景色にも、隣の人との会話にも、ゆっくり心を預けられる場所。ここに座る時間そのものを、旅の歓びにして戴きたい。その様な思いで生まれたのが、宗春号です。

旅 路

11.3 TUE 朝 × 昼 ○ (ランチボックス) 夜 ○

- ◆ ANAクラウンプラザホテル コート名古屋
7:50出発 バス車内にてランチボックス
- ◆ 大阪国際空港
12:20発予定 JAL2331便
- ◆ 隠岐世界ジオパーク空港
13:20着予定
- ◆ 隠岐自然館
- ◆ 都万港 → 菱浦港
Michi Tour専用チャーター便
- ◆ Entô 泊

11.6 FRI 朝 ○ 昼 ○ 夜 ○

- ◆ 隠岐プラザホテル
- ◆ 隠岐ユネスコ世界ジオパーク空港
10:00発予定 JAL3434便
- ◆ 出雲空港
10:30着予定
- ◆ 湯宿・草庵 すゝ奈
昼食
- ◆ 出雲大社
- ◆ 庭園の宿 石亭泊

11.4 WED 朝 ○ 昼 ○ 夜 ○

- ◆ Entô
- ◆ 菱浦港 → 来居港
内航船いそかぜ
- ◆ 赤壁
- ◆ 松浦オーナーシェフプロデュース
によるDéjeuner en plein air
昼食
- ◆ 来居港 → 浦郷港
Michi Tour専用チャーター便
- ◆ 摩天崖

11.7 SAT 朝 ○ 昼 ○ 夜 ×

- ◆ 庭園の宿 石亭
- ◆ 宮島口 → 宮島
フェリー
- ◆ 厳島神社
- ◆ 宮島鮎 天扇

11.5 THU 朝 ○ 昼 ○ 夜 ○

- ◆ Entô
- ◆ 菱浦港 → 都万港
Michi Tour専用チャーター便
- ◆ 壇鏡の滝
- ◆ 乳房杉
- ◆ 隠岐の島にて昼食
昼食
- ◆ 玉若酢命神社 / 八百杉

■利用航空会社/JAL ■利用予定バス会社／本土・隼バス・島後・隠岐一畑交通・島前(西ノ島・中ノ島・知夫里島)・隠岐海士交通 ■隠岐の島ではバスガイドは乗務いたしません。添乗員が同行いたします。 ■発着港は変更になる場合がございます。変更となった場合、船の所要時間が前後する可能性があります。天候等の事由により、各乗り物が運休となった場合、団体料金相当を払い戻しの上、行程が大幅に変更となる場合がございます。 ■エレベーターがない施設を利用する場合がございます。 ■宿泊場所によりテレビがないお部屋もございます。予めご了承ください。

11月3日(火)～11月7日(土) 4泊5日 旅行代金 お1人様／2名1室 800,000円 (4泊13食付き 税込)

旅行条件		《旅行企画・実施》		株式会社		〒457-0819 名古屋市南区海春町1番80 愛知県知事登録旅行業第2-1349号 全国旅行業協会会員 総合旅行業務取扱管理者 石橋 愛朗 ☎(052)825-4120	
国内日帰りコース	出発の10日前から8日前まで 20%	出発の7日前から2日前まで 30%	出発の前日 40%	出発の当日 50%	旅行開始後 全額		
国内宿泊コース	出発の20日前から8日前まで 20%	出発の7日前から2日前まで 30%	出発の前日 40%	出発の当日 50%	旅行開始後 全額		

Tel.052-825-4120 営業時間 平日 9:30～18:00 (土・日・祝日定休)

【国内旅行傷害保険】ご加入のすすめ／当社ではお客様が予期せぬケガやトラブルに遭遇した場合、旅行業約款に基づく補償をいたしますが、別途、お客様の任意で十分な保険金額の国内旅行傷害保険にご加入されることをおすすめいたします。ご加入につきましては、左記へお問い合わせください。
※予約時にご旅行中の緊急連絡先をお伺いする場合がございます。 ※個人情報の取扱いについては、別途お渡しする「ご旅行条件書」にてご確認ください。

ご 搭 乗 の お 客 様 だ け の 特 別 な ご 優 待

「瑞」にご乗車いただくお客様へ、
旅のひとつきをさらに豊かにお楽しみいただくための特別なご優待をご用意しております。

オールインクルーシブのおもてなし

車内では、厳選したソフトドリンクやアルコール類を追加料金なくお楽しみいただけます。生ビールを含むお飲み物はすべて旅行代金に含まれており、景色を愛でながら心ゆくまで旅の時間をご満喫いただけます。

「瑞 Passport」の進呈

ご乗車のお客様には、特別な会員証「瑞 Passport」を進呈いたします。
Passportのご提示により、Michi Tourが展開する各種ツアーやサービスを優待価格(5%OFF)でご利用いただけます。有効期限はございません。旅を重ねるほどに広がる、新たな発見と感動をお楽しみください。

グループ施設・店舗でのご優待

鯨バスグループが運営する宿泊施設及び、レストラン・カフェ等でも、ご優待をご用意しております。旅先でのひとときはもちろん、日常の時間にも旅の余韻を感じていただける特典です。

一棟貸し古民家の宿 草石庵(郡上八幡)

DowneyCafé Gate Tower店 極上煮干しラーメン 麵処素和金山店
植田店 麵処彩和栄店
豊田店 柳橋和Nico店
豊田 To Go 店

